

私の「遠野物語」 (H14,10,13 旅行)

瀬戸山 ひろ

まさか遠野まで行くとは思ってもいなかった。そもそもは平泉をこの目で見たいという東北への旅であったのに、仙台空港で花巻のホテルを追加し、帰りの飛行機の切符を買い直すなど危うい綱渡りを演じて、松尾芭蕉に加え宮沢賢治・高村光太郎そして柳田国男をたどる旅となった。

さて、花巻から遠野までは電車で行く。(注)日曜日というのに、同じ車両には一つのボックスにちょうど一人ずつが掛けているほどの乗客。のんびりと電車は10時40分に出発する。終着駅は太平洋側の釜石。途中の遠野までは各駅停車で、ちょうど60分だ。車窓からは見慣れた日本の田舎の風景が単調に続いた。そこでポケットから柳田国男の『遠野物語』を取り出して・・・というわけにはいかなかった。何しろ、突然思いついた旅だったので、そういうものが出てこない。11時41分に遠野に着く。遠野、とおの、と・お・の。この何とも言えない物寂しい響きを持つ地名(注)にふさわしく、駅周辺は山に囲まれたひっそりとした小さな町である。しかし、11時45分発の定期観光バスは満員に近く、電車の中から予約をした私をちゃんと待っていてくれた。慌ただしく乗り込む。一つだけ空いていた座席にほっと腰を下ろした。

まずは、遠野八幡宮。有名な獅子踊り・流鏝馬について江戸時代のイメージだけを膨らませる。次は福泉寺。松の一木の巨大な観音像(注)があったが、これはどうも私の思う遠野のイメージではない。ここは、情報を最大限にキャッチするべく、ガイドさんに密着しようと決心。幸い同年輩の女性ボランティアガイドさんで、名刺をもらったりして、何かとこの年齢が役立った。彼女は私の心を見抜いて、山道を下りながらいくつかの民話を東北弁で語ってくれたのだ。その中の一つ。「豆腐とこんにゃく」のお話。色黒のこんにゃくが豆腐をうらやましがる。てっきり色が白いからかと思いきや、家人が自分のことを「今夜食う今夜食う」と呼ぶからだって。どの話(語り)も最後に「どんとは一れ」というおしまいという言葉がくっついてくるのが楽しい。

何かしら、民話の里的な雰囲気になってきたと思ったら、やはり次はカップのいるという淵へ歩いていく。ここでは、昔々、子どもが馬を洗っていたらカップが現れて馬を淵へ引きずり込んだという言い伝えがある。一間はばの小川に林の梢が深く深く覆いかぶさり、確かにカップがいそうな淵だ。木の枝にキュウリを何本かぶら下げて、水に落としてあったのが楽しい。(広島に帰って『遠野物語』のカップを捜したら、「五八」の項に実はこのカップは、馬に逆に引きずられて厩の前まで来てしまい、人間に

見つかってお説教をされたということがわかった。)引き続きすぐそばの常堅寺という寺の前を通ったが、その古びた狛犬は身の丈50cmのカッパ2体だった。頭の皿にたまった雨水の中にお賽銭がいくつも入れてあったのを思い出す。

再びバスで移動し「伝承園」という所へ。米の粉で作った「ひつつみ」(すいとん)の昼食が出た。ここには遠野の伝統的民家、曲り家が移築され、嬉しいことに、柳田国男に民話を聞かせた佐々木喜善の記念館もあった。佐々木という人は、文学を志して泉鏡花に私淑していたようで、彼自身の筆で遠野の民話を書いてもいるが、それは柳田から手ひどく批評される出来映えだったらしい。佐々木は柳田を何度も訪問し東北弁で遠野の民話を語って聞かせたという。かくして柳田の『遠野物語』は、すでに散逸しかけていた土地の言い伝えを収集し、世に永久保存することになった。その話の中の「オシラサマ」には遠野の至る所で出会い深く私の心に残った。

昔々貧しい百姓の娘が馬に恋をした。そして夫婦になった。怒った父親は、馬を殺して桑の木につり下げた。娘は切り落とされた馬の首とともに天に昇っていった。「オシラサマというのはこの時より成りたる神なり。」と柳田はまとめている。

(『遠野物語』六九)

柳田が記録している内容に比べ、あちこちで目にしたり語ってもらった「オシラサマ」には色々な脚色がなされていた。たとえば、馬は美しい白馬だとか、娘には両親がそろっていたとか、父母が見た夢の中で、桑の木に白い虫がつくから大切にすると娘が言い残したとか、さまざまな「オシラサマ」がいる。民話が伝承によって少しずつ形を変えているのを感じた。伝承園の中の「オシラサマ」の部屋は怖い。10畳ほどの窓のない部屋である。入ったとたん、色の洪水。腰壁のあたりから天井近くまで、さまざまな色をした布きれが突っ立って埋め尽くされている。白、赤、青、緑、紫・・の布の重なり。古く変色したもの、真新しいもの。目が慣れてくる。人形に似せた木の棒がこれらの布きれを何枚もかぶせられて林立していたのだ。これはいつからか「オシラサマ」を千体飾り、布に願いを書いて奉納してきたものだという。私もいくらかお金を払って黄色い布を手に入れ、「健康」と書いて奉納したが、不気味な部屋としか言いようがない。(この部屋の話も『遠野物語』には登場していたのを後で知った。)

大体『遠野物語』には、怖い話が多い。嫁と折り合いの悪い母を息子が殺す話、山の神とふざけた男が祟りを受けて死ぬ話、ヤマハハに追いかけられた娘が熱湯をかけてヤマハハを殺す話・・・語り口が簡略なのにリアリティに満ちておそろしい。グリム兄弟の集めた民話に似ている。なぜかくも多くの民話が語りとして遠野に残っていたのか、折口信夫は東北は長く僻地であったために、神社・寺の信仰の入るのが非常

に遅く、そのせいで太古がいつまでも生きながらえたと考えたそうだ。なるほど。

さて、観光バスはこの後、曲がり家として有名な千葉家を訪問する。厩が同居し、二階に蚕を飼う部屋を持つ巨大な家。今も住んでいる人には、実に不便そうなお気の毒な家だった。この後、遠野の山に案内され、目鼻の判ぜられぬほど風雪に傷んだ五百羅漢を見学し、再び遠野の駅に帰ってきたのはちょうど15時であった。(以上4400円)

その日は晴天で、秋の日はまだまだ高く感じられ、解散後、一人で「市立博物館」まで足をのばした。といっても、歩いて10分程度である。この後、欲張りにも、もう一つ「とおの昔話村」へ立ち寄り、柳田国男が泊まったという旅館のいろりの前で、またまたいくつかの昔話をボランティアのおばさまから聞いた。おねだりをする感じになっているのがおもしろい。(この辺をくわしく書けばまた際限がないのでやめておく。)

あっと気が付けば暮れゆく気配、あたりに観光客はもうグンと減っている。私は超特急で土産も買わず(これが残念)駅へ駆け戻り、17時近くの電車で遠野を後にした。明日は平泉である。

(平成16年2月20日記)

(注)

柳田は私のように楽々この地を訪れてはいない。徒歩或いは馬車だろう。本文には「この地へ行くには花巻の停車場にて汽車を下り、北上川を渡り・・東のほうへ入ること十三里、遠野の町に至る。山奥には珍しき繁華の地なり。」とある。また、吉利吉里というところが遠野の近くにあり『遠野物語』にも登場する。吉利吉里が実際にある地名だとは知らなかった。

『遠野物語』によると「遠野」(とおの)はアイヌ語だそうである。

「トーはもとアイヌ語の湖という語より出でたるなるべし。ナイもアイヌ語なり。」

それにしても「遠い野」とは誰があてた漢字か、ぴったりの地名だ。近辺の地名はアイヌ語にあふれていた。

獅子踊り・一木の観音像について

これらも『遠野物語』の序に出ていた。知らないということはおそろしい。